

# 外国語教授及び学習上の 基本事項について

清 水 貞 助

ま え が き

英語教授研究所はわが国の英語教育の発展のために、1922年ハロルド・イー・パーマ博士 (Dr. Harold E. Palmer) を外国語教授顧問として招聘し、博士を初代所長として、1923年5月に創立された。研究所は所長を中心とし、新教授法の普及徹底をはかるために、研究調査・講演・著作の出版・機関誌 *The Bulletin* の発行・語学レコードの考案・研究大会の開催など縦横の活躍をした。

「英語教授研究所は、その方針として、英語教授に関する具体的な画然たる細目を作成することを避けているが、すべての合理的教授の基礎となり、その鍵ともなるべき或る根本的原理の存することを常に認めている。研究所は従来種々の機会に、言語学・言語研究法・言語心理学の領域におけるその研究調査の進むに従い、かかる原理に関する見解及び信念を宣言又は決議の形式を以て発表して来た。

更に最近の研究調査の結果、これらの原理を一層簡明な且つ一層完全な形で発表し得るに至った。これらの原理は今秋第十一回年次大会に提出せられ、その承認を求める筈である。」<sup>(1)</sup> といって、「外国語教授及び学習において遵守すべき主要要目を決定する公理十条 (Ten Axioms governing the Main Principles to be observed in the Teaching and Learning of Foreign Languages —以下「公理十条」と略す—とその説明を英文と和文で発表している。

この公理十条は、昭和9年に福島中学校教諭磯尾哲夫氏と筆者が *The Fukushima Plan*<sup>(2)</sup> に新教授法の根本原則の典拠として引用した諸家の

学説をパーマ博士が公理十条に整理したものである。(8)

この公理十条に対して国の内外から批判や意見が寄せられたので、研究所内に特別委員会を設け、検討を重ね、修正を加えて、「外国語教授及び学習上の基本事項」と名称を改め、七ヵ条にまとめ、第十二回年次大会に提出し、その承認を求めるとともに、*The Bulletin* 第108号に註をつけて発表した。

これはパーマ博士の長年にわたる外国語教授に関する調査研究の成果を七ヵ条に圧縮したもので、欧米各地における教授法のすべてを抱擁するものである。

この七ヵ条には言語学及び言語心理学上の用語が使用されているが、言語学用語がまだ決定していない上に、その定義も区々であるので理解しにくい。パーマ博士の用語の意義を探り、パーマ博士の言語観および外国語教授法の理論を解説し、批評を加え、彼の新教授法の理解に資したい。

### 外国語教授及び学習上の基本事項とその解説

1. 言語には「言語体系」と「言語運用」との二面あり。言語体系とは言語運用によりて生じ又言語運用に与かるべき言語材料及び言語慣習を含む言語の形体なり。言語運用とは言語材料を言語慣習に従ひ思想の発表若くは了解に用ひる人間の活動なり。

「言語体系」＝“code”

「言語運用」＝“speech”

〔註〕言語体系とは、分り易く説明せば語彙と文法とを一丸とせる一国語の形体又は形骸なり。その国語を使用して思想の発表若くは了解をなす者はその国語の言語体系を知識として具有せり。

言語運用とは言語体系を実地に使用する発表若しくは了解の働きにして、謂わば言語の形骸たる言語体系に生命を賦与する作用なり。

言語材料は例えば辞書に収録される語彙を言う。言語とは例へば文法書に記される言語材料の用法に関する慣習を言ふ。

〔解説〕 第1条は *langage* には *langue* と *parole* の二面があるというソッシュール (de Saussure) の理論に対する研究所の解釈を示したものである。

この三つの語の意義を説明することは容易でないが、

*langage*=language (or a language)

*langue*=language (or a language) as code

*parole*=language (or a language) as speech

と考えるのが最もよいように思われる。

なお神保格氏は三つの語に次のような訳語と説明を与えている。

*langage*: 言語 (=language in general).

*langue*: 国語慣習 (= a language as its canons of usage) or, more explicitly, 表象の体系としての国語 (=the language as a code of symbolization).

*parole*: 発表了解活動 (activities, expressive or receptive) or, more explicitly, 思考の道具としての言語 (=the language as an instrument of thought)<sup>(4)</sup>

これで *langage*, *langue*, *parole* の語義が明かになったと思うが、英語で三語の関係を示すと

*Language*=code+speech

*Speech*=language-code

*Code*=language-speech

となる。わかりやすく説明すれば、「言語体系」とは語いと文法とを一九とした一国語の形体または形骸であり、「言語運用」とは言語体系を実地に使用する発表または了解の活動であって、いわば言語の形骸である言語体系に生命を与える作用である。

つぎにソッシェールの言語の本質についての考え方の理解を深めるために、彼の名著 *Cours de Linguistique Générale* に説かれていることを、本論の用語をもって摘録しよう。

「言語体系は言語とは別物である。言語体系は言語の本質的な部分であるが、その一部分に過ぎない。言語体系は言語運用の社会的所産であり、同時にその能力の行使を個人に許すために社会団体が採用した必要なる制約の総体である。

従って言語体系は各人の脳裡に蓄積された印象の総和の形で、集団の内に存在する。それは同じ辞書を各人が一冊ずつ所有しているのに似ている。それ故に言語体系は彼等の一人一人が所有し、しかもすべての人に共通であり、各個人の意志を離れて存在しているところの何物かである。

言語には言語体系に対して言語運用がある。言語体系と言語運用の両者の間には密接な関係があつて、互に他を予定している。運用せられたことばが理解されるためには、言語の体系が備わっていなければならないし、言語の体系が活用されるためには言語の運用によらなければならない。歴史的にみれば、言語運用の事実の方が常に先立っている。概念と言語映像との関連は言語運用の間に認めるよりほかに途はない。またわれわれが母国語を習得するのは他人が話すのを聞くことによるのであつて、言語体系が脳裡に蓄積されるには、無数の経験を積まなければならない。従って言語慣習を涵養する言語の運用によって言語体系は成長発達する。この両者は共存するもので、体系は運用の道具でありまたその所産である。」<sup>(5)</sup>

また、パーマ博士は言語体系と言語運用の差を次のように説明している。

9. It is affirmed by psychologists that that heterogeneous and complex subject vaguely alluded to under the general term "language" is in reality two different and incommensurable subjects. These two subjects, although intimately bound up one with the other

by all designers and users of Language-Courses. Let us provisionally term these two subjects respectively *A* and *B*.

10. *A* may be defined as: The sum of the mental and physical activities involved when one person communicates to another (by gesture, articulation or by written signs) any given concept (i. e. thought, notion or emotion).

11. *B* The sum of the conventions adopted and systematized by a socialized mass of users of *A* in order to ensure common intelligibility.

12. *A*, then, is a set of personal activities and reactions to stimuli, whereas *B* is a set of conventions, a code. A commercial code is not the same thing as the acts involved when transmitting a message by such code; the code of Marine Signals is not the same thing as the acts involved in hoisting the flags; the musical code of notes and rests is not the same thing as the acts performed by the musician; the code represented by a Railway Time Table is not the same thing as the acts performed by one who travels by train. In short, an act (or activity) is not the same thing as the code in accordance with which it is executed.

It follows therefore that the acts of communicating thoughts by language is not the same thing as the language (or language-code) by which the acts are executed.

13. Let us now designate *A* by the specific term "*Speech*" and *B* by the specific term "*Language*" remembering that from now onwards we shall use these terms not in the vaguer more general and more popular sense, but in the strict technical sense of the definitions given above.

An English child of four years old is generally proficient in English Speech (i.e. he can generally communicate and receive successfully the rudimentary concepts appropriate to his age), but he has no conscious knowledge of that code called the English Language.

A foreign student of "English" may be profoundly versed in the niceties of that code called the English Language, and yet be most unproficient in those personal activities which are called English Speech. <sup>(6)</sup>

9. 「ラングェジ (言語) という広い名で漠然と指している、実は異種の要素から成る、複雑な合成物は二つの異った調和しないものから成ることは心理学者によって確かめられたのである。

この二つのものはたがいに緊密に結合しているけれども、学習課程を定めたり、使用したりする人々はいずれも二つを分離して考えなければならない。この二つのものを仮りに A 及び B と名づけよう。

10. Aは次のように定義を下してよからう。甲が乙に対して何か自分の考え (すなわち思想または感情) を (身振、音声、又は書いた記号で) 知らせるときに起こる心と身体との働きの総和。

11. BはAの使用者から成る社会がその社会のいかなる人にもわかるように採用し組織して定まった符号の緩和。

12. それで、Aは各個人の働きと刺激に対する反応とであり、Bは定まった符号の一群すなわちコード (code) である。しかし、商業用暗号と、それによって意味を伝えるときの動作そのものとは同一物ではない。海軍信号と旗を振る動作そのものとは同一物ではない。楽譜と演奏者の動作そのものとは同一物ではない。汽車の時間表の符号と、汽車旅行者の動作そのものとは同一ではない。つまりは動作と、動作の準拠する符号とは同一物ではない。それゆえに、思想を言語で伝える時の働きと、その働きが準

抛する言語符号 (language-code) とは同一でないということになる。

13. さて A に言語運用 (speech) という特殊の名称を与え, B に言語体系 (language) という特殊の名称を与え, これから先はこの二つの語を漠然とした広い通俗的な意味で用いずに, 厳密に上記の定義の意味で使いたい。

英国の児童は 4 歳になれば, たいてい英語の運用 (English speech) に上達する (すなわち, 年齢相当の平易な意志はたいてい巧みに伝える)。けれども英語の体系 (the English language) というあの符号の組織ある集り (code) についての意識的な知識はない。

英語を外国人が学ぶ時には英語の体系というあのコードの細かい点に深く通ずることはできるかもしれないが, それにもかかわらずいわゆる英語の運用という個人的作用にはきわめて未熟であるかも知れない。」

言語に言語体系と言語運用の二つの面があることを, ソッスュール及びパーマ博士を引合いに出して大分紙面を費したが, これで言語体系と言語運用についての明快な理解が得られたことと思う。

2. 言語材料は「言語表号」より成る。而して言語表号には聴覚に訴ふるものと視覚に訴ふるものとあり。

「言語表号」=“linguistic symbols”

〔註〕 言語材料の単位は必ずしも所謂単語のみに限らず。或る一つの概念を表はす音声若しくは記号はすべて之を言語表号と呼ぶ。而して言語表号のうち音声によってあらはれたるものを音号と呼び, 音号を記録せるものを記号と呼ぶ。英語の記号を例示すれば次の如し。

単語 (“monolog”)—cat; idea; go; in; the; oh 等  
複語 (“plilog”)—upset; onlooker; goodlooking 等  
連語 (“collocation”)—by the way; set about; in spite of 等

片語 (“miolog”)—dis-; un-; re-; -er; -s; -ed 等

符号の類 (“alog”)—[, ] [·] [?] [“ ”] [—] 等 の

〔解説〕 本条は第1条の言語材料についての説明である。“linguistic symbols” という名称は最初 エドワード・サピア博士 (Dr. Edward Sapir 1884—1939) によって示されたものであるが合理的でかつ便利な名称である。“linguistic symbols” は「言語表象」「言語記号」などとも訳されている。

言語表号は言語運用の手段として個々の概念 (concept) を表わす言語表号で、辞書にアルファベット順にならべられている単語 (word) ばかりでなく、上記の〔註〕にあるようなものをも含んでいる。

言語表号のうち音声によって表現し、聴覚及び発音感覚に訴えるものを「音声表号」(略して「音号」)と呼び、これを文字によって記録し、視覚及び書写感覚に訴えるものを「文字表号」(略して「字号」)と呼ぶ。

言語表号が文字によって表わされるものばかりでなく、音声によって表わされるものの二つに分類できることを認めることは言語の科学研究の一大進歩であるが、さらに音声表号が言語材料の本質的なものであることを理解することが必要である。イエスペルセン (Otto Jespersen (1860—1943)) の次のことばは言語の本質を明快に説明している。

“In our so-called civilized life print plays such an important part that educated people are apt to forget that **language is primarily speech**, *i. e.* chiefly conversation (dialogue), while the written (and printed) word is only a kind of substitute—in many ways a most valuable, but in other respects a poor one—for the spoken and heard word. Many things that have vital importance in speech—stress, pitch, colour or the voice, thus especially those elements which give expression to emotions rather than to logical thinking—disappear in the comparatively rigid medium of writing, or are imperfectly ren-



dered by such means as underlining (italicizing) and punctuation. What is called the life of language consists in oral intercourse with its continual give-and-take between speaker and hearer. It should also be always remembered that this linguistic intercourse takes place not in isolated words as we see them in dictionaries, but by means of connected communications, chiefly in the form of sentences, though not always such complete and well-arranged sentences as form the delight of logicians and rhetoricians.” (8)

「われわれのいわゆる文明生活においては印刷がきわめて重要な役割を果たしているので、教育ある人々は、ともすれば言語は本来話し言葉、すなわち主として会話（対話）であり、一方書かれた語及び印刷された語は、話され、あるいは聞かれた語の代用物、もちろん多くの点でははなはだ貴重であるが、他面において貧弱な代用物に過ぎないことを忘れがちである。話の中で欠くべからざる重要性を持っている多くのことがら、すなわち、強勢・音調・声の調子、すなわち、特に、論理的思考よりもむしろ情緒に表現を与える諸要素が、特に、比較的融通のきかない筆記という媒介物のなかにおいては消えてしまうか、あるいは下線を施すとか（斜体に組むとか）句読点を施すとかいった手段によって不完全にしか表わされないものである。言語の生命といわれているものは、話し手と聞き手の絶え間ないやりとりを伴う口語の交際に依存する。この言葉の交際は、われわれが辞書に見るように孤立した語によって行われるのではなくて、主として文の形式を持つ、一といっても、それは必ずしも論理学者や修辞学教師を喜ばせるような完全な整然とした文とは限らないが一とにかく文の形式を持った連続した伝達によって行われるものであることを常に忘れてはならない。」

なお、ヘンリ・スウィート (Henry Sweet) は “The second main axiom of living philology is that all study of language, whether theoretical

or practical, ought to be based on the spoken language... it is the spoken which is the real source of the literary language.”<sup>(9)</sup> 「現代国語の言語学の第二の主要な公理は、あらゆる言語研究が、理論的であると実用的であるとを問わず、話された国語に基礎をおくべきであるということである。... 話された国語こそ文語の真の源である。」といている。最近のように、テレビ・ラジオを通じて口頭によるコミュニケーションの多い時代においては、常識的に考えても、話しことばが言語の本質であることが容易に理解される。

上記の〔註〕において英語の「言語材料の単位」と考えられるものが例示されているが、これはまだすべての場合を網羅したものではない。例えば cat の複数の cats は -s をつけた複語と見るべきか、もしそうならば, foot, penny などの複数の feet, pence はどう考えたらよいか。これらは今後更に研究すべきことである。

3. 言語の習得とは所要の言語材料及び言語慣習の知識と之を運用する能力とを具備することを言う。

従って言語の学習の心理的過程は相当数の言語表号とその表わすものとを「照合一致」せしめ、言語表号より直ちにその対象を思い浮べ或は対象よりその言語表号を思い浮べ得るよう両者を「結合合体」せしめ、斯くして得たる言語材料を言語慣習に従ひ「綜合活用」するにあり。

「照合一致」=“identification”

「結合合体」=“fusion”

「綜合活用」=“operation”<sup>(10)</sup>

〔註〕 「所要の言語材料と言語慣習」と言ふは、個人の生活環境等によりその必要とする言語材料・言語習慣の量及び種類に差異あればなり。言語体系の知識は、言語の運用によりても、又単に体系の研究によりても、之を会得し得るも、言語運用の能力は

運用の練習によりてのみ得らるるものなり。

〔解説〕 この照合一致，結合合体，綜合活用は英語教授研究所の外国語教授の方法論である。

「照合一致」は公理十条においては『了解』と訳している。『照合一致』とは言語表号をその表わす物に結びつけて覚えること，すなわち言語表号の意味を知ることを用いるのである。沢村寅二郎氏は照合一致について大要次のように説明している。

Identification は一口に言えば『あれだな』『誰それだな』と真相を突きとめる働きである。語学で言えば，語・句・文章の意味を適確に突き止めることなのである。肝要なことはその英語の意味や feeling を image として適確に喚起することなのである。名詞はとにかく，動詞となるとかなりむずかしい。shrug one's shoulders は実際に西洋人がその動作をするのを見なければ適確に identify できない。感情となるとさらにむずかしい。例えば annoying は隣で騒がれたりした場合に感ずる気持ちであるが，それを日本語に適確に言い表すことはむずかしい。要するに identification が精密であればあるだけ，求められる日本語訳は精密でなければならない。

与えられた英語がじゅうぶんに identify できない場合には paraphrase するなり，絵で示すなりして説明すれば，意味がはっきりしてくる。」(11)

「照合一致」の過程は単に言語表号に関する知識を得ることであるが，従来はこれで外国語学習及び教授は完了したと考えるのが，最も普遍的な欠陥の一つであった。

外国語の教授及び学習上の主要な仕事は言語表号とその意味とを照合一致せしめたものを金属を熔接するように固く完全に結合せしむること，すなわち，結合全体せしむることである。結合合体によって，言語表号を運用する能力が養われる。照合一致・結合合体の両過程をへてはじめて言語表号の学習は完成する。結合合体のためには同じ語・句・文をいろいろの

文脈において、耳・口・目・耳などのすべての器官を通じて、反復使用することが必要である。単なる「照合一致」のためには訳読法 (Translation method) も直接教授法 (Direct method) もたいした差はないが、「結合体」のためには直接教授法のみが効果があると考えられる。

「綜合活用」は平たくいえば習得した言語の運用である。表現における「綜合活用」は口頭または文章によって思想を表現することで、理解における「綜合活用」は主として聞き方及び読み方である。「綜合活用」には「言語慣習」を扱う文法と、言語表号の意義を攻究する語義学 (semantics) の研究を必要とする。

石川林四郎氏は「言語運用」は言語自体の機能にあらずして、これを行ふ人間の活動なれば、各々の個人と場合とによって多少の差異を含み、個人の社会的生存の必要に伴ふ『言語材料』の新陳代謝と『言語慣習』の変遷とにより、『言語体系』に地理的及び歴史的変化を及ぼす。」<sup>(12)</sup> と説明しているように、言語材料の新陳代謝と言語慣習の変遷が絶えず行われている。特に最近は科学技術の進歩がおびただしい新語を生んでいる。他方どんどん廃語を生んでいる。また言語表号の表わす概念が拡張・分裂・変動し続けている。このために辞典はしばしば改訂される必要が生じてくる。言語慣習も言語材料ほどではないが、歴史的変遷をしている。最近はマス・コミを中心とする情報の発達・普及・革命が言語慣習の変遷を促している。その結果、言語慣習の歴史的の研究が必要になってくる。

最後に「相当数の言語表号」というのは、単に 1, 2 の言語表号を照合一致し、結合合体しただけでは、一国語を習得したと言えないと同時に、その言語体系のすべてを知ることは不可能であり、また不必要であるからである。この「相当数の言語表号」については次の第 4 条でも扱っている。

4. 言語材料及び言語慣習には言語運用の方面より見て必要のものとならざるものとあり。

従って比較的少量の言語材料及び言語慣習を初めに習得すること  
とは言語の学習上極めて肝要なり。

〔註〕 所謂 vocabulary limitation 及び text simplification 等を行う  
のはこの原理に基くものなり。

〔解説〕 言語体系に属する一切の材料と慣習とはいずれも運用し得るものであるが、その中には基本的なものとそうでないもの、用途の広いものとそうでないもの、頻度の高いものとそうでないものなどがある。そこで、外国語学習者が、学習期間中にどれだけの言語材料、特に単語を覚えたらよいかの研究はイー・エル・ソーンダイク (E. L. Thorndike)<sup>(14)</sup> はじめ多くの内外の学者によって調査研究されている。パーマ博士もいわゆる「パーマの3000語表」<sup>(14)</sup>を發表して、「注意深く選んだ3000語は普通の読物の95%を占めている」といっている。エーチ・ボンガズ博士 (Dr. H. Bongers) はパーマのことばに疑いをもち、ジョン・ゴールズワーゼイ (John Galsworthy), バーナード・ショー (G. Bernard Shaw) ほか英米の6人の現代作家について研究した結果パーマ博士のことばが正しかったことを確かめた。<sup>(16)</sup>

フォーセット氏と牧氏は「要するに最高重要五百語は日常語の大体五十パーセント以上を占めるであろうと考えられる。之に“essential” wordsを加へた千五百語乃至二千語はその七十五パーセントを占むるであろう。之によって見れば wide-range words の語彙が如何なる意味を有するものたるかは自ら認められるのである。」といっている。<sup>(17)</sup>

要するに、1200~1500語をもって英語における最重要語と見なししてよい。その意味で、現行中学校学習指導要領で中学3年間に1100~1300語を履習すべきであるとしているのは適切である。

パーマ博士は語いのほかに、連語<sup>(18)</sup>文の構造<sup>(19)</sup>についても基本的なものを選定し、發表している。現行中学校学習指導要領においても必ず履習すべき文型・語い・連語をあげている。

これらの研究から少数の重要な語・連語・文型を学習の初期の段階において、照合一致せしめ、結合合体せしめることは必要かつ有効な作業である。こうして習得した言語の知識と能力とを基本として、運用練習の間にさらに多くの知識と能力を習得することが、学習の望ましい姿である。

重要な語・連語・文型の選定の結果は当然教科書に反映する。一定の語い・連語・文型の範囲内で漸進的に程度を高めて行く教科書を編集すること、また内容が教材として適当なものでも、原文のままではむずかしいものを重要な語・連語・文型を用いて、平易な現代の標準英語に書きかえることが必要になる。<sup>(20)</sup> 後者の場合は一定の語いを決め、その語いの範囲でテキストを作るのである。

5. 言語運用の能力をそれにあづかる器官により、耳によるもの、口によるもの、目によるもの、手によるもの、の四つに分けて考ふとき、耳及び口による運用能力は第一次的のものにして、目及び手による運用能力は第二次的なものなり。

〔註〕「耳による運用能力」とは音号（第二条参照）を弁別、理解する能力を言ふ。

「口による運用能力」とは所要音号を発音して表現する能力を言ふ。

「目による運用能力」とは記号（第二条註参照）を弁別、理解する能力を言ふ。

「手による通用能力」とは所要の記号を書いて表現する能力を言ふ。

〔解説〕本条は言語運用の能力をそのあづかる器官によって4つに分け、さらに4つのうち耳及び口によるものが第一次的、目及び手によるものが第二次的と分けたもので、外国語教授及び学習の合理的順序を示す原則である。

パーマ博士は、書いた形式と、話し言葉の形式のどちらを先にするかに

ついて、次のように述べている。

“The only true form of speech is spoken speech, it constitutes the living language itself. All languages were spoken long before they were writtten. Orthographies are comparative recent inventions, and have no more claim to being the essence of language than shorthand... (21)

“On the basis of the foregoing considerations, we conclude that it is desirable, if not essential :

(a) To learn to speak and to understand what is said before learning to read and to write.” (22)

「言語運用の唯一の真の形は話しことばで、これが、生きた言語そのものである。すべての言語は話しことばができて、ずっと後に書き記されるようになったのである。つづり字法は比較的近代の発明であって、こんなものが言語の本質でないことは、ちょうど速記文字がそうでないのと同じである。」

「上述の考慮を基礎にして、次の諸点は欠くべからざるものでなくとも、望ましいものであると結論する。

(a) 読み書きより前に、話し方や人のいうのを理解するのを学ぶこと。」

またクリーチ・キットソン (Creach Kittson) は “Learning to speak a language is always by far the shortest road to learning to read it and write it. For the language is speech; and having gained the power to express himself in speech; the only thing necessary for the learner in order to reduce speech to writing is to make himself familiar with its orthographical system. (23) 「話すことを習うことが常に読むこと及び書くことを習うことへの最短距離である。というのは言語は話すことであり、話すことによって自分の意志を発表する能力を得たら、学習者が話すことを書こうとする場合に必要なのは、ただ正字法の組織

に精通すればよいのだから。」と能力の構造から話すことを習うことから始めるべきことを述べている。

「さて；話し方や人のいうのを聞いて理解するには、まず聞かなければならない。正確に聞くことは正確に模倣するための第一歩である。「心理学者によると、一つ概念は何らかの聴覚像と分離することはできない。ねこという動物を思い出せば、必ず英語の cat か、仏語の chat か、独語の Katze か、日本語のネコという語が聞えると想像する。あるいはそれを声に出していうと想像するのである。このように、概念と聴覚像との融合は非常に緊密でまた自然であるから、たいていの者には聴覚像の起ったことが分らない。しかし、実験によれば、聴覚像は必ず概念に伴って離れないことがよくわかる。われわれは何か思ったり考えたりするときは、必ずそれに相当する聴覚像を作っているのである。

甲はその概念に相当する聴覚像を作ると同時に、それを音声にする。」(24)

このような概念と聴覚像との融合は音声表号を用いる聞き方、話し方の場合ばかりでなく、文字表号を用いる読み方、書き方の場合にも、その中核になっていることが、心理学によって証明されている。そこで概念と聴覚像を結合合体することが言語学習の第一歩である。「換言すれば一定の量の英語を耳に聞いて即座に了解し、また一定の量の英語を自由に口に発し得るようになることが、英語習得上の進歩の根柢を成す。この基礎の固らないうちに築かれて行く英語の建物は、多くの場合、長年月を要した後も、危ぶなげである。」(25) この根柢を築くことが Oral Method の目ざすところである。

また聞くこと、話すこと、読むこと、書くことのいずれに重点をおくべきかという問題であるが、すでに説明したように、概念と聴覚像との結合合体が、すべての能力の基本であり、英語はもともと一つの全一体であるので、四つの能力は、相依り相助けて、発達するものである。また、生徒の進路適性も明確にわからない中学や高校普通科においては四つの能力を



all-round に伸ばすことが望ましい。

6. 発音とは聴覚に訴ふる言語表号の音の単位たる単音並にその配置等を扱うものなり。又文法とは言語表号の組立を扱ふものなり。この両者はいずれも言語そのものの形体又は機能にして、之等を言語より引離して考ふことを得ず

〔解説〕 第6条は発音および文法の外国語教授上の役割を述べたものである。

英語には一定数の素音 (phoneme), があり, これが音号の単位である。素音が連なって音節となり, 単語となり, 句や節や文となる。すべて言語は音の連続である。この際に同化 (assimilation), アクセント, 文強勢 (sentence-stress), 強形 (strong form), 弱形 (weak form), イントネーション (intonation), 休止 (pause) などが起り, それぞれに一定の型がみられる。その型について簡単な知識を与えるとともに, 集中的に練習することが重要である。

なお正確な発音を教える手段として, 発音符号を用いるが発音符号の性格について正しい認識を与えないと, 発音符号のための発音という本末顛倒に陥らないよう注意が必要である。

外国語教授に必要な文法は, 学習している言語体系における言語慣習のうち, 運用の指針となり, 学習能率を高めるものでなければならない。言語運用の単位は文である。文には各国語に特有の型がある。外国語教授に当っては, 個々の構成要素を扱う語形論 (accidence, morphology) よりも, 個々の要素が有機的に連っている文型に習熟せしむべきである。

母国語の場合には, 周囲の人々の言語を繰り返し聞くことによって, 文型や音声に自然に習熟する。しかし, 文を構成する個々の要素については必ずしも組織的な正確な知識を持っていない。これに反して外国語学習者は, 言語体系についてはかなり正確な知識を持っているが, これを運用して正しい文に組立てる能力に乏しい。従って外国語教授においては, 文型に

ついて正しい知識を与えるとともに置換法 (substitution), 転換法 (conversion) 等によって, その運用能力を養うことが最も重要である。

文型にはその重要度から発表力にまで高めるべきものと, さほど重要度が高くなく理解力にとどめてよいものがある。

7. 翻訳とは一つの言語体系による表現を他の言語体系による表現に転換することなり。従って翻訳は双方の言語体系の知識と運用とに或る程度まで通じたる者にして初めて行ひ得る技術なり。故に外国語学習の場合における翻訳はその外国語の習得状態を検査する為の簡便なる一手段となり得るも, 之を学習する為の手段又は学習の方法としては単に補助的な用をなすに過ぎず。

〔解説〕 本項は翻訳の定義と, 外国語学習における翻訳の位置・役割を述べたものである。

公理十条の公理七の〔註〕によると「翻訳とは, 最も適当に解釈すれば, 同一の思想を連続的に二つの異なる国語で考える技術である。即ち換言すれば, 或る国語で表わされた思想感情を別の国語で表はす技術である。」<sup>(26)</sup>

パーマ博士は Direct Method を定義して, “the method in which the minimum use is made of the mother tongue for purposes of identification and no use of it at all for purposes of fusion” 「照合一致のためには最小限度に母国語を使用し, 結合合体のためには全然母国語を使用しない方法」といっている。この意見は来日以前から変わっていないのであるが, 日本に欠けていた口頭練習を強調したために, 全く翻訳を排斥したかの如く誤解されている。彼は “The exclusion of translation as a regular means of conveying the meaning of units is an uneconomical and unnatural principle.”<sup>(27)</sup> 「単位の意味を伝える適当な方法として翻訳を駆逐することは不経済で不自然な原則である。」といっている。さらに “Let us recognize frankly that the withholding of an ‘official’ or authentic translation does not prevent the student from forming faulty associa-

tions, but that, on the contrary, such withholding may engender them.”<sup>(28)</sup> 「公認のまたは確かな翻訳を与えなければ、生徒が誤った連想を作ることを防げるのではなくて、反対に、翻訳を与えないから誤った連想を作らせるかもしれないことを率直に認めよう。」といている。イスベルセンは翻訳は言語教授上有益で欠くべからざる方法であるといつて、翻訳を使う場合として次の四つをあげている。

1. 生徒に意味を教える手段として
2. 生徒の理解を試験する方法として
3. 母国語から外国語への翻訳は外国語で書く練習として
4. 母国語から外国語への翻訳は、外国語で表現できるかどうかを試験する方法として、また文法上の規則を理解しているかどうかを試験する方法として。<sup>(29)</sup>

以上の説明でいわゆる新教授法において意味を教える手段としての翻訳の意義は明瞭である。

パーマ博士は翻訳はそれ自体間接的でないことについて、次のように述べている。“Translation is not in itself necessarily ‘indirect’ (or ‘inconcrete’, as we should prefer to express it); it may be relatively indirect when compared with good examples of immediate association, but it is undoubtedly more ‘direct’ or an obscure context.”<sup>(30)</sup> 「翻訳はそれ自体において『間接的』(むしろ『非具体的』というほうがよいのだが)なものではない。直接連想のすぐれた例と比較すれば、翻訳は比較的間接的であろうが、面倒なばくぜんとした定義やあいまいな文脈に比較すれば、翻訳のほうがいっそう『直接的』であることは疑いない。」

翻訳は以上のように意味の伝達、評価の方法として、必要で有益な手段である。その他に文法上の問題の解明にも役立つ。例えば、He made her happy. を「彼は彼女を幸福にした。」と訳して、主語＋述語＋目的語＋補語という英語の語順を教え、日本語との相違を意識させるのは、文法上の

問題の解明の例である。

悪いのは翻訳でなくて、翻訳だけで外国語教授が完結したと考えることである。外国語教授で大切なことは意味を理解させたら、できるだけ外国語を使用し、日本語を意識の表に出ないようにすることである。

## お わ り に

以上の外国語教授及び学習上の基本事項は次のように換言できるだろう。

1. 従来漠然と使われていた Language という語を Language as code と Language as speech とに分けて考え、Language as speech に表現活動だけでなく了解活動を認める。

2. 言語表号には音声表号と文字表号とがあり、音声表号が主体で、文字表号は原則として音声表号の記録である。

3. 言語学習の心理的過程は Identification と Fusion の二つに分けられる。外国語教授の重点は Identification にではなく、Fusion におくべきである。

4. 言語材料及び言語慣習には運用上その重要度に差がある。外国語教授の手段としては、初期において重要度の高い言語材料及び言語慣習に習熟せしむることが必要である。

5. 耳及び口によって音声表号を運用する能力を第一次的能力といい、目及び手によって文字表号を運用する能力を第二次的能力という。第一次的能力、第二次的能力のいずれにおいても概念と聴覚像の融合していることが必要である。従って読み書きに入る前に聞き話すことによって概念と聴覚像を融合しておかなければならない。

6. 発音及び言語表号の組立てにはそれぞれの国語に一定の型がある。外国語教授の初期においてこの型に習熟せしめることが教授能率を高める。

7. 外国語教授の多くの改良意見において、翻訳は一般に排斥されているが、翻訳に外国語教授上は補助的な用をなすに過ぎない。

戦後わが国に口頭教授法 (Oral approach) はじめ多くの教授法が紹介されたが、根本精神においても、音声や文型を重視する点においても、これまで述べた七つの基本事項と異なるところがない。パーマ博士は、最初は極端な Oral Method や Direct Method を提唱したが、次第にわが国の実状を考慮し、その主張を修正したというのは誤解であることはパーマ博士自身 Oral Method について “The Oral Method is not a Complete Method in itself, but is a necessary feature or phase of the Complete Method.”<sup>(81)</sup> 「口頭教授法はそれ自身完全な方法ではないが、完全な方法のうちの必要な特色であり、一つの面である。」といっていることから明かである。また、パーマ博士は来日の年にすでに複合的学習法 (The Multiple Line of Approach)<sup>(82)</sup> を唱えている。複合的学習法というのはある目的へ到達するためにもっとも適切な手段を取り入れるという折衷主義 (electism<sup>(83)</sup>) とも、“the (philosophy of the complete life” (円満な生活の哲学) とも呼ばれる。これでわかるように、パーマ博士はあらゆる教授法の長所を採用し、最良の教授法の確立に努力を続けたのである。また教授法の技術としても型式的問答法 (Conventional conversation<sup>(84)</sup>)、置換法 (Substitution) などの考案は画期的なものである。

温故知新とか “There is no new thing under the sun.” 「日の下には新しきものあらざるなり。」ということばがあるが、“Oral approach”<sup>(85)</sup> ということばも “Contrast”<sup>(86)</sup> ということばもパーマ博士は昭和の初頭から使っていたのである。この偉大なる教授法学者、音声学者の業績を再検討することは、博士によって種を蒔かれた日本の英語教育界の発展に役立つ理論や技術を学ぶことになるのではなかろうか。

## Notes

1. *The Bulletin of the Institute for Research in English Teaching*, Department of Education, No. 101 (昭 9) p. 12.

2. T. Isoo and T. Shimizu, *The Fukushima Plan of Teaching English in Schools of Middle Grade Supplement to the Bulletin No. 106*, Department of Education, 1934.
3. 石川林四郎『英語教育の理論と問題』英語教育叢書 研究社, 1900, p. 95.
4. *The Bulletin No. 102*, p. 2.  
神保格氏はこの後 Language as code を言語材料と訳し, Language as speech を言語活動, 言語行動と訳している。石橋幸太郎氏はそれぞれ素材言語, 運用言語と訳している。イギリスの言語学者 Sir Alan Gardiner は *The Theory of Speech and Language* (Clarendon Press, Oxford, 1932) において speech および language という用語で両者を区別している。
5. ソッシュール述, 小林英夫訳『言語学原論』岡書院, 1923, pp. 21~40 参照。ソッシュールの説に対する異説もその後出ている。
6. Palmer, Harold E., *Memorandum on the Problem of English Teaching in the Light of a New Theory*, Institute for Research in English Teaching, Tokyo, 1924, pp. 2, 3.
7. Palmer, Harold E., *The Scientific Study and Teaching of Languages*, Oxford University Press, London, 1968, pp. 17~19.
8. Jespersen, Otto, *Essentials of English*, 開拓社, 1943, p. 17.
9. Sweet, Henry, *A Practical Study of Languages*, Oxford University Press, London, 1964, p. 49.
10. Identification, fusion を *The Bulletin No. 101* では「了解」「鑑解」と訳している。その後 identification は「照合」, fusion は「融合」operation「活用」と訳されることが多い。
11. *The Bulletin No. 89*, pp. 7~9.
12. Direct Method はこの fusion の成立を期するものであるが, パーマ博士はその著 *English Through Actions*, 開拓社, 1930, 3 版, p. XIX において a rapid-fire of stimuli and reactions すなわち矢つぎ早に質問応答を行うことが Fusion を助けるといっている。パーマ博士は「語学学習は習慣形成の過程である。」(*The Principles of Language-Study*, p. 54) と述べ, 言語習得には The Five Speech-Learning Habits を形成することが必要であるといっている。フリーズ (Fries) は言語学習の過程は mimic-memorize の意味で MIMMEM METHOD を提唱している。
13. 石川林四郎『英語教育の理論と問題』p. 100.
14. Thorndike, E. L., *The Teacher's Word Book*, Teachers College, Columbia University, 1921.
15. Palmer, Harold E., *Second Interim Report on Vocabulary Selection*, IRET,

- 1931.
16. 語学教育研究編『英語教授法辞典』開拓社, 1962, p. 277.
17. L. Faucet and I. Maki, *A Study of English Word Values Statistically Determined from the Latest Extensive Word-Counts*, 篠崎書林, 1932, p. 16. 同書には「1-500」迄の単語を“indispensable words”, 「501-2,000」迄の単語を“essential words”「2,001-5,000」迄の語を“useful words”と名づけている。
18. Palmer, Harold E., *Report on English Collocations*, IRET, 1935.
19. Palmer, Harold E., *Specimens of English Constructions*, IRET, 1934.
20. 英語教授研究所ではこの趣旨からパーマ博士の“The Reader System” (1926) という小冊子の構想の実現のために “The Standard English Readers” (10冊, 1927), *English Through Questions and Answers* (5冊, 1925), *Graded Exercises in English Composition* (2冊) および, “the ‘Simplified English’ Series” 及び “the ‘Simplified English for Side Reading’ Series” の2種の叢書を編集し発行した。
21. Palmer, Harold E., *The Principles of Language-Study*, Oxford University Press, 1964, p. 98.
22. *Ibid.*, p. 104.
23. Kittson, Creach, *Theory and Practice of Language Teaching*, Clarendon Press, Oxford, 1918, p. 41.
24. 語学教育研究所編『英語教授法辞典』p. 217.
25. 寺西武夫, 『話方, 聴方, 書取及び習字』(英語教育叢書) 研究社, 1935, p. 7.
26. *The Bulletin* No. 101, p. 14.
27. Palmer, Harold, E., *The Scientific Study and Teaching of Languages*, p. 60.
28. *Ibid.*, p. 65.
29. Jespersen, Otto, *How to Teach a Foreign Language*, George Allen & Unwin Ltd., London, Reprinted, 1928, p. 56.
30. Palmer, Harold E., *The Principles of Language-Study*, p. 84.
31. Palmer, Harold E., *The Oral Method of Teaching Languages*, Heffer & Sons, Cambridge, 1922, p. 36.
32. Palmer, Harold E., *The Principles of Language-Study*, p. 108. 本書の初版は London の Harrap から 1922 年, すなわちパーマ博士来日の年に出版されている。
33. Sweet は *The Practical Study of Language* p. 3 において “A good method must, before all, be comprehensive and eclectic.” 「よい教授法は

まず第一に包括的で折衷的でなければならない。」といっている。

34. これはパーマの教授技術のうち最も重要なもので、その説明は *English through Actions* の中に、問答の種類、方法は *The Oral Method of Teaching Languages* (Heffer & Sons, Cambridge, 1922), *The Technique of Question-Answering*, (IRET, 1931) に詳説してある。
35. *The Bulletin* No. 69.
36. 発音、文法教授において日本語の発音、文法と比較していることは、*Concerning Pronunciation* (開拓社, 1325) 及び *The First Six Weeks of English* (開拓社 1929) などによっても明かである。